九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「雲遊詩人」徐志摩の目に見る日本 : 郭沫若の「留別日本」と比較して

裴, 亮
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19669

出版情報：中国文学論集. 39, pp.118-132, 2010-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国文学論集　第三十九号

「雲遊詩人」徐志摩の目に見る日本

――郭沫若の「留別日本」と比較して――

裴　亮

はじめに

一九三一年十一月十九日、不慮の飛行機事故により、新月派詩人・徐志摩は三十四年間の短い生涯を閉じた。事故後、陳夢家は邵洵美に依頼され、徐志摩が生前書いた詩作を選び、遺作詩集を編纂して刊行した。「雲遊」はその詩集中の一首であり、また其の詩集の題名でもある。[1] 当時、徐志摩の妻であった陸小曼は「序文」の中で、「洵美が私に摩の『雲遊』の序文を書かせたが、私は未だに彼のこの「雲遊」がいつ書かれたのかを知りませんでした。雲遊、その通り、彼は正に雲のように自由に遊び去ってしまいました」と書いている。[2] それ以降、徐志摩に関する記念集や論文集等は、数多く「雲遊」その言葉を題名として使われている。旅というものは、徐志摩にとって文学創作の対象であり、霊感の源流でもある。空で人生の旅立ちを終結した徐志摩を「雲遊詩人」と称することはまさに相応しいだろう。詩人としての徐志摩は、嘗て様々な国と地域へ遊歴した。その中で、注目すべき旅先の一つといえば、三回も訪れた日本が挙げられよう。従来、魯迅や周作人また創造社の作家達いわゆる「親日派作家」に関する研究が数多く発表されたが、徐志摩のような「欧米留学派」の作家と日本の関係はいまだ究明されていない課題は多い。本稿はこれまでの先行研究を踏まえ、徐志摩と郭沫若の同名詩作「留別日本」の比較を手掛かりとして、彼の一連の日本を主題とした紀行詩文に焦点を当て、「雲遊詩人」徐志摩に於ける日本像の考察及び解釈を試みようとするものである。また、郭沫若の作品との比較的分析によって、中国近代作家の日本像の多様性も提示したい。

一　三回の日本滞在と二首の「留別日本」

徐志摩と日本との直接の繋がりについては、旅人として日本に三回滞在した事実だけで、地縁的にも深い関係にあったとは言い難い。しかし、日本の風景や人情は彼の創作欲を活性化させる主題であり、日本を背景として綴った文章も数多く残っている。ここでは、徐志摩の日本滞在の実情を整理しておきたい。一回目：一九一八年八月、南京号でアメリカに向けて留学に行く途中東京に上陸。二回目：一九二四年、タゴール訪日の随員として本格的な日本訪問を実現。三回目：一九二八年六月、アメリカを経てヨーロッパへ旅行に行く途中、神戸や横浜を経て上京。『神戸又新日報』（一九二八年六月二十日）の記事「南京政府の或る使命を帯びて」は、三回目となる来日の時期、ルート、目的等を報道している。[3]

徐志摩が日本を詠み込んだ詩の中には、一九二四年夏に書いた「留別日本」（『志摩的詩』所収、北新書局、一九二五年）がある。それと対照的に、一九二三年の四月に、郭沫若も同じ題名の作品を書き、同年五月九日に雑誌『孤軍』（第一巻第八、九合併号）に発表している。ほぼ同じ時期に、当時の詩壇における二大天才詩人が期せずして同名の作品を書いたのは興味深い。先ず、書かれた二つの「留別日本」の創作背景について考察しておきたい。タゴールに付き添って訪日した徐志摩は、帰国後廬山へ休養に行き、そこでタゴールが日本で行った講演を翻訳した。その過程で、訪日の思い出が引き出され、著されたのが「留別日本」である。一方、郭沫若の「留別日本」は、彼が十年の留学を終わって、一九二三年四月に家族と共に日本を離れ、中国へ向かう時の心情を詩句で表したものである。郭沫若の自伝『創造十年』に、「一九二三年三月、福岡に丸四年七ヶ月住んだ私は、ともかく医科大学を卒業した。……北京へは行かず、家族を連れてやはり上海へ帰った。出発した日はちょうど四月一日だった」と記している。[4]帰国ルートは北九州門司港からの船旅であり、一日もかかる海上帰途は、まさに彼に日本に対する複雑な思いと母国に対する憧れを喚起させる機会を与えた。また、「留別日本」の結末には「四月一日」と記されていることから、この詩は郭沫若が四月一日帰国の途中で創作したものではないかと推測する。

二　同名作の裏：「涙浪滔滔」事件をめぐる二人

実は、徐志摩と郭沫若の著作の中には、作品に限らず、書名が全く同じになったものもある。[5] 具体的な内容を徐志摩の散文集『落葉』（一九二六年六月、北新書局出版）の「序文」から引用する。

この本の書名は剽窃の疑いがあるから、ここで説明せねばならぬ。「落葉」は一昨年九月に書いたものである。去年三月渡欧するまえに、伏園さんが本を出版することで私を訪ねてきたとき、この書名にしようと決めた。しかし、意外にも最近郭沫若さんも『落葉』という小説を出版した。最初書名を変えようと考えたが、本が同名ということは人間が同名であるように、しょっちゅうあることなので、大丈夫だと考えを変えた。その上、北新は一年前にもう広告を出した。それゆえ、書名をそうしておいた。幸い、本書の性質は郭君のものとは全く違うから、郭さんの器量では、私を剽窃者なんて呼ばないはずだ。

ここでは、徐志摩が郭沫若とどういう事柄にあったのかを検討したい。一九二三年の春、徐志摩は中学の同級生・郁達夫の紹介を通じて当時上海にいる郭沫若と知り合った。詩人である二人はそもそも互いに親近感を持ったが、徐志摩が胡適の編集する『努力週報』五十一号に発表した「雑記――假詩、壊詩、形似詩」（一九二三年五月六日）で、郭沫若の「涙浪滔滔」という詩句の表現を批判したことから、二人の間に隙間風が吹き始めたのである。この事実は有名で、多くの先達によって語られている。[6] 紙幅の関係で、ここで詳しくは論じないが、この事件をめぐる二人の新詩に対する認識を中心に抜き出してみたい。徐志摩は前述した文章で、郭沫若の詩句について次のように述べている。

私はある新詩を思い出す。題目は数ヶ月前の故居を再訪するというものだったはずだが、その詩人は自分の以前のベッドと机を撫で、窓の外の雲と川の景色を眺め、思いがけず感傷的になり、こらえきれずに――

「……涙浪滔滔」……もとより彼が本当に涙を流したかどうかは断定できない。だが、たとえ流したとしても浪となってさらに滔滔とは少なくともならなかったとおもう。……要するに、形容が実を失えば一種の偽物である。泣くことを形容する字句はいくらでもあり、泉が湧くに喩え、雨がにわかに降るに喩えるならばまだ筋

が通る。だが、「涙浪滔滔」とは誰が想像できようか。

徐志摩に批判された詩句「涙浪滔滔」は、『創造季刊』第一巻第一号（一九二二年五月）に掲載された郭沫若が郁達夫に送った書簡「海外帰鴻・一」の中の一首「重過旧居」に見える。『創造十年』によって、一九二一年夏、三ヶ月ぶりに福岡へ帰った彼は、家主に追い出された妻子と子供を探し出した後に、以前住んでいた家を見に行き、以前の思いが一度に襲って来て、涙が溢れ出したのである。徐志摩は郭沫若がこの作品に託した辛い思いを、作者の立場に立って考えることができなかった。しかし、徐志摩にとって、この詩句を指摘することを借りて郭沫若の人柄を風刺する考えはなかったに違いない。同じ文章の中で、彼は文芸批評に対する認識を、「評論家の仕事は作品の真偽を評論し、作品の優劣を判断する。彼は文芸界の裁判官である。彼は美を追求する情熱があり、仇のように偽りを憎む義憤がある。彼がよい作品を褒める目的はこのような作品を奨励し、虚偽的な作品を排斥し、芸術の正義と尊厳を維持することである……詩も真詩、悪い詩とでたらめな詩に分けられる。……真詩は情緒が調和したうえ（対立を越えて）自ずから現れたものである。」と語っている。「雑記――假詩、壊詩、形似詩」（五月六日）を発表した直後の五月三十日に、徐志摩は北京師範大学附属中学にて「詩人和詩」と題した講演を行い、自分の「真詩観」を宣言している。(7)

詩は人々の感受性と情緒の発生を描く。……同時に、一種の潜在意識――イマジネーションが必要である。それによって、深い感動を潜在意識の中に溶かし、結晶させる。そうなってはじめて一首の詩ができたと言える。……詩は極上品でかつ純粋なものであり、容易く作るわけにはいかないし、発表するために作るわけにもいかない。詩の真義を得て、まずそれを心の中に溶かし、如何しても我慢できなくなり、心から飛び出そうとするとき、それを書き出す。こうして書いた詩はいわば真詩である。

徐志摩は「真詩」を書き、「真の詩人」になる為には、個人の感受性と想像力を養い、真の情緒を強化した上で自然に表現することが必要だと強調している。帰国早々、文壇のありさまを良く知らない徐志摩は、新詩に対する思いを忠実に表わし、まさにこの「真詩」を基準に、郭沫若の作品を例として純粋な文芸批評を綴ったのである。その結果、創造社の作家達と物議を醸すことになった。誰の詩と明記しないまま「涙浪滔滔」という詩句を例として

批判したこの文章を、創造社の郭沫若の親友たちは「沫若の詩を攻撃し、沫若の人格を侮辱する意図がこの文章のすべてだ」と理解したのである。[8] 当時、徐志摩の作品が胡適主編の『努力週報』に最も多く掲載されたことによって、すでに徐志摩を胡適の一派と見なす傾向があった。この頃の創造社が胡適主編の『努力週報』や文学研究会と感情的に対立していた情況もあり、この徐志摩と郭沫若との事件は、当事者の意を越えて大きなものとなったのである。文壇における派閥の関係を全く知らずにこの論争の巻き添えとなった徐志摩は、返事として「天下本無事」を書き、『晨報副鐫』第一五三号（同年六月十日）に発表した。誠意をこめて初志と弁解をしたため、「自分の文章は一般論を語ったに過ぎず、偽詩といったからといって沫若を偽人というつもりなど全くない、偉大な詩人にもつまらない詩はあるのだから」と釈明している。更に、「詩壇に誰のものが最も優れるのかと聞かれる度に、私は必ず第一に郭沫若を推薦すると同時に、彼の初期の実験作が見習うほどのものに値しないことも隠さない」などのややほのめかした評価に、詩人同士と論争のライバルの身分が重なり、郭沫若に対して徐志摩のプライドが顔を覗かせているのは興味深い。

ところで、二十年代前半まで、郭沫若は、新詩の創作またいわゆる文芸創作について、如何に認識してきただろうか。新詩への道を歩み始めた頃の彼は、一九二〇年二月十六日宗白華宛の書簡の中で、次のように述べている。[9]

> アリストテレスは、「詩は自然の模倣である」と述べていた。私はこの言葉は、いわゆる写実家が描写に忠実であるばかりでなく、詩の創作の尊さが自然流露にあると意味するものと思われる。詩の生成は、自然物のように一切の不自然な仕種を混ぜるべきものではない。これが新体詩の生命である、と私は思う。（中略）自由詩、散文詩の建設は、近代詩人がすべての束縛に縛られず、全ての既成形式を打破することにあり、詩の神髄はもっぱら自然流露に現れることにある。（中略）詩の文字は、すなわち情緒自体の現れである。

ここで、郭沫若の新詩観について詳しく論じることができないが、以上引用した部分から見ると、郭沫若の「情緒の自然流露説」と徐志摩の「真の情緒を結晶、自然に表現」の「真詩観」はいかにも類似していることがわかる。しかし、二人が主張する情緒の現す方式と方向は全く反対である。徐志摩の言う「詩の真義を得て、まずそれを心の中に溶かす」という考えは「内に凝縮」といえる一方、郭沫若の方は「外に拡張」と位置付けられるだろう。彼

らの詩作の実際からみれば、郭沫若の詩作は規則に縛られず、自由な詩形が多く見られる。それと対照的に、徐志摩はある程度の規則の範囲で自由な情緒を表現する。それ故に、郭沫若の詩作の中には、「情緒の誇張」や「力の崇拝」などといった特徴が現れている。逆に、徐志摩の数多くの作品は、「情緒含蓄」や「音韻調和」として絶賛される。観念上の違いがあったからこそ、郭沫若にとっての本音を現す「涙浪滔滔」は徐志摩に「偽詩」と罵倒されたのではなかろうか。

以上見てきたように、「涙浪滔滔」の事件後、徐志摩と郭沫若の歩んで行く道は全く別方向になっていった。とは言え、徐志摩が常に郭沫若の文筆活動に強く関心を持っていたことは、二人の論争やまた『落葉』の同名事件についての釈明からも窺える。それによって、徐志摩は郭沫若の「留別日本」を目にしていた可能性は高いと考えられる。但し前回の「涙浪滔滔」の一句の評論が、彼を予期せぬ論争に巻き込ませた経験があったから、彼はそれを戒めと思って、「留別日本」の同名事件では同じように説明しなかったのだろう。両作品はいずれも六連から構成される抒情詩であり、二つの「留別日本」は形式において非常に類似している。徐志摩は同時期に「沙揚娜拉十八首」も書いた以上、なぜまた「留別日本」を書いたのだろう。それは徐志摩が、郭沫若に書かれた日本と自分で体験した日本が遥かに違うことが気になり、郭沫若の作品を「真詩」、「純粋な詩」ではないと思いながら、論争を避けるために批判せず、郭沫若の「留別日本」を意識的に模倣して、自分が見た日本の様子を世の中の人々に伝えたかったのではなかろうか。

三　異なる「日本体験」、両極端の「心象風景」

さて、両作品の内面には徐志摩と郭沫若によるどのような思いがあったのか。作家の作品の内面には往々にして作家が所属しているそれぞれの文学団体の風格や美学理念また地域性などの特徴が反映されている。日本に留学した郭沫若は創造社の中心である一方、欧米に留学した徐志摩は新月社の中心人物である。この二つの同名作品に焦点を絞ることによって、各流派の日本認識の相違点も窺われるだろう。それを通して、徐志摩と郭沫若の各自の日

本体験を考察したい。

タゴールの一九二四年の日本訪問を実現した経緯について、当時彼ら一行の通訳を担った和田富子が、「私は、朝日新聞社の門司支局長と相談して、日本滞在中の費用を出してもらい、大阪、東京等で講演を依頼することにして、北京のタ翁宛に電報を打った」というように語っている。[10] タゴールの恩恵を蒙った徐志摩も、日本側から十分な経費支援を得られた。しかも、貴賓として優遇され、一般の中国人では経験し得ない体験を心ゆくまで味わうことができた。更に、日本の主な地域を巡ることによって、徐志摩は関東大震災後の復興における日本人の一所懸命の様子を目撃し、日本人に対する好感を有すると共に、当時の中国民衆の国民性や社会問題を反省する契機ともなった。

郭沫若は、そもそも自然への帰属の思想を持ち、大量の筆墨を用いて日本の自然の美しさを讃え続けた。しかし、「留別日本」は以前の作品と違って、民族的な怒りを含めた特別な作品である。それは、郭沫若の別の側面からの体験によって、鬱積した情緒が爆発したのである。例えば、彼は日本人から人種的な差別を受けた体験を、「日本人は中国のことを支那と稱する。本来「支那」といふのには何等悪い意味はなく、これはもと秦の字の音が変化したのだといふ人も有る。しかし、これが日本人の口から出る場合には、欧州人が猶太人をヂューと呼ぶのよりももっと下等になる」というように訴えている。[11] 外国の大切な貴賓として日本を訪れた徐志摩と遥かに異なって、異国に身を寄せる一留学生・郭沫若にとって日本に対する認識は、真っ先に日々の細かい日常生活から得られるものであった。生活や経済の圧力、前途が見えない苦悶など、身心両面の様々な辛い体験は、自伝『創造十年』上にもほとばしる。

（一）異邦と故国：鏡としての日本

以上取り上げたような日本体験は、彼達それぞれの「留別日本」の中に詠み込まれている。次に、各作品の具体的な分析を行っていく（次ページの比較表参照。番号はそれぞれの連を示す。傍線は筆者）。

詩人の立場から概観して見ると、徐志摩の作品は彼が中国で深い印象を残した日本を回想するのに対して、郭沫若の作品は彼を圧迫した日本に決別する。両作品には一つの共通点があり、それは日本を鏡と見なし、日本との対

	中国と日本との対照	日本のイメージ
徐志摩「留別日本」：異邦への憧憬	①我慚愧我來自古文明的鄉國， 我慚愧我脈管中有古先民的遺血， 我慚愧揚子江的流波如今溷濁， 我慚愧——我面對著富士山的清越！ ⟺ ⑥為此我羨慕者島民依舊保持著古往的風尚 在樸素的鄉間想見古社會的雅馴，清潔，狀曠 我不敢不祈禱古家邦的重光，但同時我願望 願東方的朝霞永葆扶桑的優美，優美的扶桑！	我記得扶桑海上的朝陽， 黃金似的散布在扶桑的海上； 我記得扶桑海上的群島， 翡翠似的浮漚在扶桑的海上—— 沙揚娜拉！ 「沙揚娜拉十八首」第一連
郭沫若「留別日本」：故国への回帰	②你們島國的風光誠然鮮明，你們島國的女兒誠然誠懇， 你們物質的進步誠然驚人，你們日常的生涯誠然平穩； 但是呀，你們，無產者的你們！你們是受著了永遠的監禁！ ⟺ ⑤可憐呀，邪馬台的兄弟！ 我的故山雖是荊棘滿途， 可是那兒有清潔的山茶可煎。那兒有任鳥飛的清空， 那兒有任魚遊的江湖，那兒的牢獄雖有如無。	③新式的一座文明監獄喲！ 前門是森嚴的黑鐵造成， 後庭是燦爛的黃金照眼。 無期徒刑囚的看守人 文人、學者、教徒、藝術家… 住的是白骨砌成的象牙宮殿。 ④雖然有有為之人想破獄而逃， 但可憐四方的監牆太高， 前門有猙獰的惡犬守門， 更比那山中的虎狼殘暴； 你們竟連說話都不敢大聲， 大了，你們便要地塗肝腦。
	徐志摩：「理想郷」としての「扶桑」	**郭沫若：「文明監獄」としての「邪馬台国」**

照によって祖国を顧みる構造である。詩作に現れた異邦と故国に対する態度は、徐志摩の場合、例えば第一連と第六連で、彼は日本の文化に傾倒し、日本の異国情調に憬れている。それに対して、祖国である中国への批判者となって、現実の中国に対する不満を持ちながら古典文化の盛況を追懐する。このような考えは、詩に限らず、日本訪問を語る講演稿「落葉」（一九二四年秋作）の中にも見られる。

日本人の天災に打ち勝つ勇猛と根気を見れば、我々はすぐに我々の困窮、我々の貧乏、我々のみっとも無さに恥じざるを得ない。物質上の貧乏ではなく、この精神上の貧乏こそが恥じるべきものだ。……我々の醜態はすでにうまい具合に彼らの余裕と対照的になり、我々の精神生活は充分な修養を有していない。

逆に、郭沫若は国粋主義のような主張と立場になり、故国へ早く帰りたい心境を詠っている。例えば第二連と第五連、当時彼の目に映じた日本はいくら先進的で美しいと言っても、祖国とは比べられない国である。母国へ飛んでいく「回帰」の気持ちが溢れている。この作品に表れた心境は、自伝『創造十年』の中にも反映されている。例えば、「五四以後の国内の青年が、みな知識欲に駆られ、先を争って外国に走っていた時、外国にいた私はむしろ知識の桎梏に苦しんで自由解脱を求め、国へ馳せ戻って我が愛する人の懐に身を投げかけたいと思っていた」。このような心の底から伝わって来る声は、正に「留別日本」の最も相応しい注解であると思われる。

（二）「理想郷」と「文明監獄」

異質な体験を経、異なる立場に立ち、相違する態度を持っていたからこそ、詩作に現れた「心象風景」いわゆる「日本のイメージ」もはるかに両極端なものになるだろう。中国の古典文献や伝説の中では「扶桑」を海外仙境と称し、それを世の中の楽土に喩えるのがよく見られる。[12] こういう伝統は、現在に至るまで脈々と受け継がれている。徐志摩の詩に現出する日本像はまさに「扶桑」のような理想的な存在である。それに対して、長い時期に亘って日本で生活した郭沫若は、日本の様々な姿を目撃し、五感で味わうことができた。彼は日本への「賛美」と「不満」の両面性を抱いたが、「留別日本」はただ長期間鬱積していた苦悩や不満や不自由などの心情だけを吐き出した。そのゆえに、十年も滞在した日本は彼の心の中では、無形の監獄となった。「留別日本」は彼の十年の留学生活に終止

符を打ったような象徴的な作品とみなしていいだろう。

前文では、二十年代初期に於ける徐志摩と郭沫若の詩論について言及したが、「留別日本」を書いた時期に至って、二人の文芸観にはどのような転換が起こったかを検証したい。この時期、中国の内乱や民族の発展に関わる政治問題は、郭沫若に影響を与えた。しかも直ちに彼の文芸観に反映した。一九二三年九月九日『上海週報』第十八号に発表した「芸術家和革命家」の中で、「芸術家は彼の芸術を用いて革命を宣伝すべきである……このような芸術家は彼の作品を用いて革命を宣伝すれば、それも実行家が一つ爆弾を持って革命を実行に行く事と同じように、革命事業に対して実際の貢献がある」と述べている。早期の詩論では、郭沫若は詩の本体の芸術性を唱える。一九二三年に至ると、文学の社会性を重視、文学者の社会的な責任を強調し始めた。更に、二四年五月から河上肇の『社会組織と社会革命』を翻訳したことによって、これまでの文芸観を一変し、自ら「一マルキシストになった」と自認する。後に、文芸の社会的使命と革命性を文学創作の信条とした。徐志摩と郭沫若を比べると、正に「もし徐志摩を自然の子と呼ぶことにすれば、郭沫若はむしろ社会の子であるはずだ」[13]と感じられる。徐志摩自身は、啓蒙家的な役割を自覚していなかっただけでなく、普遍的個人主義を、「私は、人から教えられることが嫌いな個人主義だ。決してお高くとまっているのではなく、私はただ個人だけを知り、個人だけをはっきり認め、個人だけを信用している」と提唱していた[14]。従って、同じ主題の同名作品にしても、郭沫若は階級論の視点から日本を批判し、革命者の姿を詩作に呈している一方、徐志摩は一貫して自らの真の感情をこめて日本に対する思いを作品に詠み込んでいた。

四　「美」と「精神」の発見：徐志摩の日本認識

以上、徐志摩と郭沫若の「留別日本」を比較してみた。一九二〇年代は、日中関係史に於ける極めて緊張した時期であったにも関わらず、徐志摩の作品の中には、郭沫若のような反抗や敵対する感情は全くないだけでなく、逆に非常に純粋な賛美と憬れだけが表現された。次に、この問題について、徐志摩の日本認識を中心に探ってみたい。

（一）「芸術と生活」の目から観察

一九二二年、イギリスから帰国した徐志摩は清華大学にて英語で「ART AND LIFE」と題した講演を行った。この講演の草稿は郁達夫の手を経て、創造社の『創造季刊』（第二巻第一期、一九二三年五月）に英文のまま掲載されている。この文章は、周作人の「生活之芸術」[15]より二年早い。彼はこの文章の中で、まず中国の社会の現実や芸術の現状を概観し、真の芸術と呼ぶに値しないと批判した。その証拠として、中国の詩人の中で、李白を除けば、世界的な詩人が存在しないことを挙げている。そして、西洋文化の源流である古代ギリシャ文明を賞賛する上で、なぜ中国には西洋に匹敵する芸術がないのか、と問い質す。彼の結論によれば、中国に真の芸術がないのは、人生と芸術の相互関係を中国人は理解していないからなのである。「私たちに芸術がないのは、私たちに人生がないためである。人生の貧乏は必然的に芸術の貧乏を生む」、つまり「芸術は人生の反映であり、人生は芸術に対して責任を負っている」と捉えられている。それ故に、日常生活においても審美の目あるいは審美意識こそが重要な要素であり、美しいものに対する繊細な感覚は、強い知性や道徳よりもはるかに人生にとって重要であり、実り多いものであると述べている。周作人も「生活之芸術」の中で、ギリシャ文明の重要性を強調し、唐代の文化を受け継いでいる日本文化は生活上の芸術性を有していると述べている。西洋で習得した知識から生まれた徐志摩の「芸術と生活」は、周作人が東洋文化を体験した上で生まれた「生活の芸術」と図らずも一致している。実際に、徐志摩はまさに「芸術と生活」の視点から日本その国の生活、文化を観察していた。彼自身の言葉から引用する。[16]

> 私たちは私たちの生活を愛し、美の原則を日常生活に応用することができると彼は言った……私は自分の固陋、浅薄を認める。この度日本を見て初めて生活には美の可能性があると想像できるようになった。はじめてタゴールの話は嘘ではないと信じるようになった。彼は、私たちの魂にあったはずだが、今では薄くなった美の品性を見抜いた。そして、私たちの祖先は生活の中で美の原則を実現したことを見抜いた。

彼の言う通りに、徐志摩は日本訪問を通して、東洋の生活の美の可能性を新たに認識し、現実の中国に存在していない芸術的な生活を発見した。だからこそ、彼は「留別日本」で、「日本体験」を生き生きとした文辞に表現し、また唐代文化の遺風である日本文化を謳歌したのである。

（二）「汎愛」の心から感受

徐志摩は「芸術と生活」の目から日本を見るだけでなく、「汎愛」の心を持って日本を深く感受した。徐志摩はタゴールとの関係が深いので、タゴールの汎愛思想の影響を受けたことは彼自身も認めている。親友である胡適は、徐志摩の人生観は美と愛と自由から構成されると評価している。彼が陸小曼宛の書簡（『愛眉小札』、一九二五年八月二十七日）に書いた「我沒有別的辦法，我就有愛；沒有別的天才，就是愛；沒有別的能耐，只是愛；沒有別的動力，只是愛」という言葉は彼の汎愛思想の宣言と見なすこともできるだろう。徐志摩は一九二四年北京師範大学で行った講演の中で、関東大震災後、東京の再建を目にした感想を詳しく述べている。

私たち中国人は災難の中でなんとか暮らしてきた。……しかし、このすべての災難を合わせても、私たちの隣人が一年前に遭った災難に匹敵することはできない。そのことの恐ろしさは人類の忍耐力の極限を超えたと私は断言できる。（中国）国内では日本人がこんな災難に遭ったことを喜び、あいつらはそうなるのは当然だと言う人がいる。この人たちをレントゲンにかけ、良心があるかどうか確かめる事を協和病院の先生にお願いしたいものだ。恐ろしい運命の前で、全人類は山の中で大きい雷と激しい嵐に遭う羊のようなものだから、種族、政治といった偏見や意地などにこだわっている時だろうか？……私の日本に来る前と日本を見た後の見解は全く違う。

創造社の成仿吾も筆を執って東京大震災を語ったが、態度は逆で「我々はただこの光景を一度想像しさえすれば、東京の火災はいかに詩の趣に富むのかを知ることができる。……もし私が日本を好きならば、それは私が日本の地震と火災を好むのである。……東京の今回の天災は本当に私に多い陶酔の享楽を与えた」というように述べている。[17] 徐志摩の考えによれば、世界すべての人間は平等で、種族や政治などの偏見は一切捨てるべき、大震災があった日本を喜ぶのではなく、同情すべきである。さらに彼は、日本人が大震災後一意専心に再建を目指して努力した精神に感動し、それを東洋精神の勝利と賞賛した。このような観点は当時において、非常に独特且つ得難い見方と思われる。しかし、天災後の日本人の努力の姿がいくら徐志摩を感動させたといっても、関東大震災の時に日本人が中国人を虐殺した事件[18]を無視することはできない。ただ、それは徐志摩の与り知らない真相であった。

おわりに

中国人は『山海経』をはじめとして、昔から深い関心を持って日本を語り継いできた。近現代に至ると、黄遵憲の『日本国誌』に代表される風俗記や、王韜の『扶桑遊記』に代表される旅行記や、戴季陶の『日本論』に代表される考察論、また周作人の日本に関する小品文など、枚挙にいとまはない。様々な形式で日本の社会と文化を様々な側面から論じるのに伴い、中国人における日本像も虚像から実像へと変遷し、近代中国知識人の「日本体験」も鮮やかに浮かび上がってきた。本稿で取り上げた徐志摩と郭沫若は、近代詩人として日本を見、体験し、そして各自理解した日本を詩の形で再現した。以上、郭沫若の「留別日本」と比較しながら、徐志摩の日本認識を考察した。見てきたように、徐志摩の紀行詩文に現れた日本像は、日本で長く生活した作家達の複雑且つ変化に富むものとは異なり、「理想郷」のような「扶桑桃源」であり、それはある程度の幻想ないし錯覚に発する「心象風景」すなわち蜃気楼であると言えるだろう。このような日本認識が形成された底には、彼の「生活の芸術」の理念と「汎愛」の思想が伏流している。魯迅や周作人や郭沫若と比べて、徐志摩の詩作における日本像は断面的かつ単純とは言え、近代中国知識人の日本観の一側面として看過できないものである、と筆者は考える。

注

（1）詩集『雲遊』、一九三二年上海新月書店出版。詩作「雲遊」は最初に「献詞」と題して『猛虎集』（一九三一年八月、新月書店出版）に収録、後「雲遊」と改名、『詩刊』第三期（一九三一年十月）に掲載。

（2）例えば、『徐志摩散文・雲遊心踪』（浙江文芸出版社二〇〇一）、『雲遊：朋友心中的徐志摩』（長江文芸出版社二〇〇五）、『雲遊・海韻』（江蘇鳳凰出版集団二〇〇九）などがある。

（3）報道内容は下記の通り：「十八日午後四時香港から入港、同夜十二時出帆のエムブレスオブ・カナダで南京から或る使命を帯びて渡米すると傳へられたる徐志摩、王徴文の両氏が神戸に立ち寄った、徐氏は文士、王氏は商人と称し

三月間米国を漫遊するのだといって真意を吐かなかった時節柄多少曰くづきの渡米らしく推測された徐氏の談に……」

(4) 一九三二年刊後、数種の版本がある。本稿における『創造十年』に関する引用は、小野忍、丸山昇訳の『黒猫、創造十年他』(東洋文庫一二六、平凡社、一九六八年)を参照した。

(5) 「落葉」は、徐志摩が一九二四年、北京師範大学で行った講演の題名である。その講演文は『晨報六周年記念増刊』(一九二五年十二月一日)原載、後に散文集『落葉』(一九二六年六月北新書局出版)所収。郭沫若の小説「落葉」は、上海『東方雑誌』第二十二巻の第十八号(一九二五九月二十五日)、第十九号(十月十日)、第二十号(十月二十五日)、第二十一号(十一月十日)原載、後に単行本『落葉』として一九二六年四月上海創造出版社より出版。

(6) 例えば、渡辺新一氏「徐志摩試論——英国帰り詩人」(『中央大学論集』第五号、一九八四年)、星野幸代氏博士論文『徐志摩と新月社——近代中国の文芸的公共圏』(東京大学人文社会系研究科二〇〇二年)などがある。

(7) 「詩人和詩」、『新民意報』副刊『朝霞』第六期(一九二三年六月)原載。

(8) 成仿吾は『創造週報』第四号(一九二三年六月三日)に「通信四則」を載せ、公開状という形で反論を行った。

(9) 郭沫若『三葉集』(『郭沫若全集』文学編・第十五巻、人民文学出版社、一九九〇年七月)。

(10) 高良とみ著『高良とみの生と著作』(二〇〇七年、ドメス出版)、第七巻二一四頁を参照。

(11) 郭沫若「日本人の支那人に対する態度」(『日本評論』第十二巻第十号一九三七年)。

(12) 例えば、(漢)東方朔の『海内十洲記』の中には、次のような記録がある。「扶桑在東海之東岸,岸直,陸行登岸一万里,東復有碧海。海広狭浩汚,与東海等。水既不咸苦,正作碧色,甘香味美。扶桑在碧海之中,地方万里。……是以名为扶桑仙人」。

(13) 李怡著『中国現代新詩与古典詩歌伝統』(西南師範大学出版社、一九九四年)第二二九頁を参照。

(14) 徐志摩「列寧忌日——談革命」(『晨報副鐫』、一九二六年一月二十一日)。

(15) 周作人「生活之芸術」、『語絲』第一期(一九二四年十一月)掲載。

(16) 徐志摩「Art and Life」、『創造季刊』第二巻第一期(一九二三五月一日年)掲載。本稿は、『徐志摩全集』(天津人民

中国文学論集　第三十九号

出版社、二〇〇五年版）第一巻の虞建華、邵華強の中国訳版を参照。

（17）成仿吾、「東京」（『創造週報』第二十三号、一九二三年）。

（18）この事件に関して、一九二三年十一月七日発売禁止となった『読売新聞』は「支那人惨害事件」という記事で下記のように述べている。「大地震の当時及び其以後京浜地方に於て日本人の為に惨害を被った支那人は、総数三百人位に上るであるらうとの事である。就中最も著大に最も残虐な事実は、九月五日府下南葛飾郡大島町の支那人労働者合宿所に於て多数の支那人が何者にか鏖殺され、また同月九日右支那人労働者の間に設けられた僑日共済会の元会長王希天氏も、亀戸署に留置された以後生死不明となったといふ事実である。」

（附記）本稿は、九州中国学会第五十八回大会（二〇一〇年五月十五日、於熊本学園大学）において、「雲遊詩人の目に見る日本――徐志摩の日本体験及び関連紀行詩文を中心に」と題して口頭発表した原稿をもとにしたものである。司会の岩佐昌暲教授をはじめ、ご批正を賜った諸先生方に心よりお礼を申し上げます。なお、本稿は、中国国家建設高水平大学公派留学プロジェクトの研究助成金による研究成果の一部である。